

# P13

口腔衛生に関する指導効果の判定

～第1報：保護者の歯科知識の比較

○高 裕子, 若松 美咲, 入木田 美雪, 西田 茉央,  
松元 一生, 宮川 尚之  
(医)まほうつ会 みやかかわ小児矯正歯科)

## 【目的】

日常の小児歯科臨床において,保護者に対する口腔衛生に関する指導は患児に対する指導よりも重要である。定期健診時に患児がブラッシングの練習をしている時などに情報提供を行っているが,実際それがどの程度保護者の知識として定着しているのかを検証する機会はない。効果的な指導を行うには,指導に対する知識の定着を常にフィードバックして,指導内容を定期的に見直す必要がある。本研究は当院に5年以上通っている患児の保護者と通院2年未満の保護者に対して歯科知識の検定テストを実施し,その結果を比較検討し,歯科知識の定着に差異があるかを検証する事が目的である。

【対象と方法】対象は当院に定期的に通院する患児のうち,5年以上欠かさず通院している(平均6.0年)(以下A群)患児の保護者40名と通院2年未満(平均1.25年)(以下B群)の保護者28名である。

方法は当院で開発した歯科知識検定テスト患児用に回答させた。各群で平均正答率,正答率の分布,設問ごとの正答率について比較した。

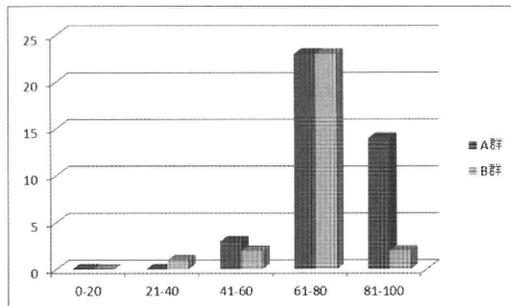
## 【結果】

### 1)平均正答率

A群は77.6%,B群の平均正答率は72.0%であった。

### 2)正答率の分布

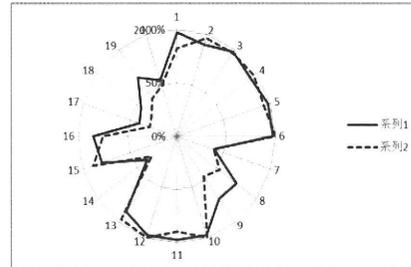
正答率の分布を以下に示す。



### 3) 設問ごとの正答率

以下に両群設問ごとの正答率を示す。

系列1をA群,系列2をB群とする。



【考察】今回の研究では両群の歯科知識に対する差異は小さかった。また設問ごとの正答率の傾向も類似していた。正答率の高い設問は,むし歯になりやすいおやつ・飲み物・食べ方・時間,スポーツドリンク,歯肉炎,歯石,フッ素の使用,歯磨剤であり,齲蝕と歯肉炎についての指導は毎回の受診時に指導ができ,A群・B群ともに高い理解がなされていると思われる。またB群でも正答率が高いということは,歯科医院での指導もあるが,歯科知識として常識的な知識となっているものもあると思われる。正答率の低い設問は,よく噛んで食べる意味,カリオスタット検査,歯の成熟,下顎の横方向への成長の時期,上顎の永久歯との交換時の抜歯の時期であった。これは,むし歯や歯肉炎予防ではないその他の設問が多く,齲蝕や歯肉炎についてより,指導が個別になりがちで,指導している時とそうでない時のばらつきが大きいと考えられる。A群では,デンタルフロス,歯ブラシの選び方,外傷時の対応についてが,B群より正答率が高かった。A群の正答率の高さには,長期間来院しているため,定期健診時に話題が広がり様々な歯科知識の指導ができたことが考えられる。

保護者の歯科知識が増えることにより,また知識を実際に活かすことにより,小児の口腔環境の改善が図れるため,今後はどのように今回正答率が低かった項目を受診時に指導していくかが課題である。

## 【文献】

- 1) 岡本誠 著「新長期間の小児歯科」砂書房,東京 2010
- 2) 五十嵐清治/吉田晃哲 編:「世代をつなぐ小児歯科」クインテッセンス,東京 2009